琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

アトリエ琉游舎だより 72号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3
2020年2月12日発行

○未だかつて出会ったことのないような美しく壮大な虹に遭遇する幸運を得ました。

○1月29日（水）午前11時頃のことです。冬には珍しい大雨が２時間ほど降り続いた後に一気に雲が動き、その雲間から太陽の強い光が射し込みました、すると北面、高原山を背景に大地から根を生やしたように東西を結ぶ半円状の大きな虹が架かったのです。

○「虹」は夏の季語です。暑い夏の日、夕立の後に陽が差し込むと虹が立つことが良くあります。文字通り空中に立つように虹が浮かび上がります。ところが私が見た「冬の虹」は大地に橋脚を据え、天空にくっきりと半円を描く虹の架け橋でした。

○「冬の虹」は冬の季語です。冬の虹は主に晩秋から初冬の時雨が降った後に見ることができるようです。雨上がりで空気中に十分な水分があり、陽射しが強く、太陽の位置があまり高くないことが虹のできる条件なので冬の虹も不思議ではないのですが、それでも空気の乾燥した大寒の時候にあれだけの見事な虹が見られるとは思いもよりませんでした。

○虹は吉兆か凶兆か時代や民族よってそれぞれのとらえ方があるようですが、今年は良いことがありそうだ、いや、大きな災害の前触れか、などと起ってもいないことを考えるのはやめにして、私はただただ冬の虹の美しさを記憶にとどめたいと思います。

○この素晴らしい冬の虹を皆様にもおすそ分けしたいのですが、虹に見とれて写真を撮り忘れてしまいました。というわけで写真に切り取られた虹の記録も貴重ですが、今回だけは私の心に縦横無尽に広がっていくあの日の冬の虹の記憶を独り占めさせて下さい。🙏

2・3月のスケジュール

月	火	水				
			13 映画会 13:30	14	15	16
17	18	19	20 映画会 13:30	21	22	23
24	25 読書会 13:30 居酒屋の会16時	26	27 映画会 13:30	28	29	3月1日 写経会 13:30
2	3	4	5 映画会 13:30	6	7 詩話会 13:30	8
9	10 読書会 13:30	11	12 映画会 13:30	13	14	15
16	17	18	19 映画会 13:30	20	21	22

読書会
2月25日(火)
3月10日(火)
13時半から

写経会
3月1日(日)
13時半から

詩話会
3月7日(火)
13時半から

居酒屋の会
2月25日(火)
16時から

映画会
毎週木曜日
13時半から

狂言綺語…逍遥

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

冬のコリーナは空の面積が拡がり明るくなります。雑木林の葉っぱがすべて落ちて枝だけになり、視界が一気に開けるからです。今まで葉っぱに覆われて見ることの出来なかった日の出も日光や高原や那須の山々もいくつかのポイントに立てばその姿を顕わしてくれます。羽黒山も手に届くところにあります。夏に比べて空の面積が広くなりそれだけ夜空の星の数も増えるのでまだ暗い明け方の散歩が楽しいのです。30分ほど歩いて家に戻る頃には東の空が次第に赤くなり、いつの間にか星が消えてなくなります。山も星も変わらずそこにあり続けるのに私たちの目からは見えるときもあれば見えないときもある。あるがままに観ると言うことはいま目に見えていることだけを観ると言うことなのか、いま目に見えていなくてもそこにあるはずのものを観ることなのか、などという屁理屈はどうでも良くなり、いつの間にか頭の中が空っぽになって、気づくと琉游舎に戻っています。日々の気ままな逍遥は頭と心の清掃の役目を果してくれているようです。

お腹でも頭でも空っぽになるとそれを満たしたくなります。そんな時ふと手に取った本に感心し深く考えさせられました。「宗義制法論」注1という一見難しそうな江戸時代初期の論述です。これが面白い。互いに日蓮聖人を宗祖とする相手を論旨明快、コテンパンに論断し蟻の這い出る隙間もないほど追い込んでいく迫力に、思わず吹き出し論破される相手方が気の毒に思えてしまうほどでした。著者の日奥は日蓮宗不受不施派の始祖といわれ安土時代から江戸時代にかけて活動した人です。不受不施派は余り知られていないのですが江戸時代にはキリシタンとともに弾圧の対象とされ信仰を認められなかった宗派です。幕府の寺請制度から排除され地下活動で細々と法灯を保ち続け、明治になってやっと公に認められた時の信者は二万人ほどだったそうです。隠れキリシタンと同じように、日蓮宗にもこのような弾圧の歴史がありました。著者の日奥も二度島流しの罪を得ています。不受不施派の主張は明快です。日蓮の教えの根本にある「法華経を信仰しない者から布施を受けたり供養を施したりしない」という宗義を守ること、この一点です。それに対して日蓮宗の大方の寺は幕府との対立を避け権力秩序に組み込まれていく（幕府から布施を受ける）ことを選択していきました。宗祖日蓮聖人の根本教義を曲げてでも教団の存続を図るか、寺を奪われ教団がなくなり命を落としてでも宗祖の教えを守るか。現実世界の中ではこの勝負はどうやっても日奥の負けです。国法（権力）の中でのみ存在を許される宗教組織が、国法より仏法を上に置くことが不可能なことは自明の理なのですから。むろん私の所属する現在の日蓮宗は日奥にコテンパンに論破された側の流れを汲むものです。

しかし私がこの書で考えさせられたところは日奥の主張にあるだけではなくその主張を成立させている膨大な教養のバックボーンにあります。私は常日頃仏教関係の本を読んでいくときに、日本人の思想文化の根底に共通に流れる基礎知識というものを今までの教育の中で全く受けていないことを痛感させられていました。経の注釈書、祖師たちの書いた遺文など彼らが引用する中国典籍の出典や意味は、補注がなければほとんど理解できません。そればかりではなく古典や和歌にさりげなく引用されている仏教や中国思想なども全く分かりません。明治以前の貴族や僧侶や学者は四書五経、老荘思想、兵法書、史記、漢詩、三蔵注2などに共通の理解があるという前提で、歌を詠み物語を書き教えを説き論争を戦わせていたのです。これをごく一部のインテリだけの教養だったと考えてよいものでしょうか。例えば私が感心した日奥の「宗儀制法論」は同レベルの教養を持った法敵日乾に向けて書かれたものです。しかしこれが弾圧下の地下組織、不受不施派のバイブルとして読まれ続けたから現在私が読むことが出来るのです。主な読者は明治まで信仰を守り通した二万人の学なき庶民（農民）だったでしょう。そこに引用されている中国典籍、経、日蓮上人の遺文の意味は恐らく主導者の僧侶が注釈したかもしれません。が、彼らにそれを聞くだけの教養の受け皿がなければ馬の耳に念仏だったはずです。文化科学思想はごく一部のインテリだけで成立するものではなくそれを支える三角形の底辺が必ずあるはずです。その底辺が拡がり頂点が高くなること、つまり教養のピラミッドが大きくなっていくことがその民族の文化が成熟していくことだと思います。私たちは今、江戸時代の地下に潜る農民たちの持っていた日本文化にはるかに及ばない成熟度の低い日本文化しか持ち合わせていないのです。

私が受けた教育はいわゆるキリスト教を源とする合理主義と二元論の思考方法です。これによって日本は莫大な科学的恩恵を受けたことは承知の上で、しかしその教育と引き換えに有史以来連綿と引き継がれてきた日本人の教養遺産を明治以降食いつぶしここに至って雲散霧消させてしまったことが残念でなりません。少なくとも私が日本人として持ち合わせるべきこの教養は江戸時代の庶民に遥かに及ばないことは明らかです。それとも江戸時代まで引き継がれたその教養は、これからの未来には何の役にも立たないので顧みる必要はないと言うことでしょうか。グローバル化が日本文化を支えた教養の廃棄を支持するのであれば国是として「美しい国、日本」注3ではなく「世界は一家、人類は皆兄弟」注4のスローガンを掲げるべきでしょう。

今年の冬は暖冬です。日々の気ままな小一時間の逍遥（徘徊？）から戻ると汗ばむほど。寒い季節は冷えた空気が頭を覚醒させてくれるはずなのですが、どうも今年は勝手が違います。琉游舎に戻っても頭と心の清掃が行き届かなかったようで、本を開く間もなく気持ちのいい睡魔が襲ってきます。これもまたあるがままの自分なのか、暖冬のせいであるがままに観ようとする目が曇ったのか、と下手な考えをこねているうちに眠りに落ちていきました。（出琉）

琉游舎：戸井　出琉・恭子
お問い合わせ先：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319－17コリーナ矢板Ｃ－８５０

注1：「近世仏教の思想」岩波書店、注2：仏教聖典の総称、注3：現在の日本の国是、注4：笹川良一